

# 松橋朋潤（ともひろ）ピアノリサイタル

## *Program*

モーリス・ラヴェル (1875-1937)

組曲 《クーランの墓》より 前奏曲「ヌヌエット」「トッカータ」

フレデリック・ショパン (1810-1849)

舟歌 嬰へ長調 作品 60  
黒鍵のエチュード作品 10第 5  
幻想即興曲 嬰ハ短調 遺作  
子犬のワルツ作品 64第 1

\*\*\*\*\* 休憩 \*\*\*\*\*

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン ( 1770-1827)

ピアノ・ソナタ第 2番 八長調 作品 53《ワルトシュタイン》

フランツ・リスト ( 1811-1886)

メフィスト・ワルツ 第 1 番 《村の居酒屋の踊り》

## Profile

松橋 朋潤 (まつはしともひろ)

1990年松本市生まれ。

TV朝日ドラマ「相棒」にピアニスト役として出演。

ピティナ・ピアノコンペティション全国決勝大会コンチェルト部門初級優秀賞。A級、C級、D級入選。Jr.C級ベスト8賞。第1回シヨパン国際ピアノコンクール in ASIA優秀賞。第5回日本演奏家コンクール第1位。松本市顕彰受賞。第2回レ・スプレンドル音楽コンクール第2位。第9回ローゼンストック国際ピアノコンクール審査員賞。第14回日本クラシック音楽コンクール第4位。第1回ネオ・クラシック国際コンクール奨励賞。銀座国際音楽祭に出演。

2011年蓼科音楽祭に出演。イタリアにて開催された36thフィナーレ・リーグレ国際コンクール第3位。聖ジョバンニ・バチスタ大聖堂コンサートに出演。

第10回ロシアン・ピアノスクール受講。成績優秀者による選抜演奏会に出演。

東京藝術大学附属音楽高等学校を経て、東京藝術大学4年に在籍中。ピアノソロを副学長の渡邊健二教授に、ピアノデュオを角野裕教授に、室内楽を加藤洋之氏に師事し研鑽を積んでいる。2013年4からは東京藝術大学大学院修士課程に進学。

モーリス・ラヴェル (1875-1937)

組曲《クープリンの墓》

ラヴェルはフランス印象派の作曲家として記述されることが多いが、その作品には古典的佇まいを持ったものが多い。この《クープリンの墓》はその代表的な例であり、17~18世紀のフランスで多く書かれた組曲の体裁をとっている。ここでその名前が触れているフランソワ・クープリン (1668-1733) もその潮流の中心にいた作曲家であり、チェンバロ独奏のために20以上の組曲を残した。この作品においては (作曲当時の) 先進的な響きと古典的な形式が、非常に洗練された書法の中で美しく結びついていると言えるだろう。

ラヴェルは第一次世界大戦の足音が迫る中、まるで遺書を書くかのように急いでピアノ三重奏曲を完成させると、1914年、母国フランスのためにトラック運転手として従軍した。この組曲はそれ以降、従軍の合間を縫って書かれた作品である。彼自身は戦線に立つことはなかったが、大戦の中では多くの友人を亡くすこととなり、この組曲に含まれるそれぞれの小品が、友人ひとりひとりの思い出に捧げられている。また1917年初めには母の死にも見舞われ、この作品が完成するまでに彼は多くの悲しみを味わうこととなった。戦争によって失われたもの、また2度と戻ってくることはない古い時代への思いを馳せる作品として、この組曲はラヴェルにとって大きな意味を持つ作品であったことだろう。この中から今日のリサイタルでは前奏曲、メヌエット、トッカータの3曲が演奏される。

フレデリック・ショパン (1810-1849)

舟歌 嬰へ長調 作品 60

黒鍵のエチュード作品 10第 5

幻想即興曲 嬰八短調 遺作

子犬のワルツ 作品 64第 1

今回のリサイタルでは、ショパンによる作品が4曲演奏される。ショパンはピアノ演奏に際して、手前に置かれている白い鍵盤よりも奥の黒い鍵盤を好んで使用したことが知られているが、これら4曲も全て黒鍵を多く用いる楽曲である。この独特な習慣からもわかるように、ショパンは教師から教わる以上のことを独学で身につけていった天才肌のピアニストかつ作曲家であった。彼は20歳を過ぎた頃、自身のピアノ演奏技術を保ち、かつ披露するための作品として《練習曲集》作品10を出版した。この中には12の練習曲が含まれ、「別れの曲」「革命」といった有名曲が現在よく知られているが、今日演奏される黒鍵のエチュードもその中のひとつである。その名の通り右手が黒い鍵盤ばかりを弾き、白い鍵盤に降りてくることがほとんどないことからこの愛称で呼ばれている。この《練習曲集》はリストに献呈されたが、リストがこの曲集を華麗に弾きこなすのを見たショパンが「彼から技術を盗みたいくらいだ」と驚きを持って語ったと伝えられている。

この《練習曲集》作品10に続いて、20代半ばにショパンはもうひとつの《練習曲集》作品25(「エオリアン・ハーブ」や「木枯らし」を含む)を書き残すが、それと同時期に書かれた有名曲として幻想即興曲がある。これは現在「即興曲 第4番」として表記されることが多いが、1834/35年頃に作曲されたため、他に3曲残されている即興曲のどれよりも早く書かれたものである。19世紀初頭には即興曲というジャンルが流行し、シューベルトなど多くの作曲家がピアノ独奏のための即興曲を書き残したが、ショパンのこの作品もその流行に倣ったものであろう。しかしショパンはこの作品を友人のノートに書き残しただけで出版することはなかったため、その出版は友人によって遺稿が整理されるまで待たなければいけなかった。《幻想即興曲》という名前もその友人によって付けられたものである。今日における人気とは裏腹に、ショパンが出版を望んでいなかったということは、非常に親密かつ個人的な感情が込められた作品であると考えられるかもしれない。

これら2曲は20代の若き青年ショパンによって書かれたものであるが、もう2曲は30代、彼にとっての早すぎる晩年に書かれた作品である。舟歌 嬰へ長調はイタリア、ヴェネツィアのような街にいる船乗りが、波に揺れる船のリズムに合わせて歌う様にインスピレーションを得て1845年ころ書かれた。ピアノ演奏の面でも楽曲構成の面でもショパンの素晴らしい円熟が見られる傑作のひとつである。そして1846年から4年頃には子犬のワルツ(3つのワルツ 作品64より第1曲)が書かれるが、これは交際していた女流作家ジョルジュ・サンドとの関係が悪化しつつあった時期である。彼女が飼っていた子犬が、自らの尻尾を追いかけくると回る様子を思わせることからこの愛称がついたとも言われるが、184年に破局することとなるサンドとの思い出をショパンが織り込んでいるのか、それともこういった挿話は単なる憶測に過ぎないのか...今日となっては確かめるすべもない。

## ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン ( 1770-1827) ピアノ・ソナタ第2番 八長調 作品 53《ワルトシュタイン》

ベートーヴェンに暖かい支援を寄せたパトロンの一にフェルディナント・フォン・ワルトシュタイン伯爵 ( 1762-1823) がいるが、このソナタは彼に献呈されたことからこの名が付いている。伯爵はベートーヴェンに、当時の最新モデルのピアノをプレゼントするなどしたが、このソナタもそうした最新鋭の楽器に触発されて 1803-1804年頃に書かれたと考えられている。このソナタ全体が持つ迫力からも感じられるように、それまでのピアノでは耐えられなかったであろう、楽器を酷使するようなパッセージが多く用いられている。特に終楽章では、左右の手に連続してオクターヴのグリッサンドが現れ、鍵盤も指も強靱でなければ演奏できない難所として知られている。当時よりもさらに鍵盤を沈める力が多く必要になっている現代のピアノではその難易度が倍増しているが、今日の演奏ではそれがどのように乗り越えられているか、ぜひステージに目を向けてみていただきたい。

## フランツ・リスト ( 1811-1886) メフィスト・ワルツ 第1番 《村の居酒屋の踊り》

シューベルトの歌曲からマーラーの交響曲にいたるまで、ゲーテ ( 1749-1832) の戯曲『ファウスト』を読んだ作曲家の多くがそれに触発された作品を残している。同様にリストは 1857年、《ファウスト交響曲》を作曲したが、それに続いて 1860年には管弦楽曲《レーナウのファウストによる2つのエピソード》を作曲した。これはニコラウス・レーナウ ( 1802-50) による叙事詩『ファウスト』に触発されたもので、その第2曲が現在「メフィスト・ワルツ第1番」として知られる《村の居酒屋の踊り》である。

今日演奏されるピアノ独奏版は単なる管弦楽版の編曲ではない。むしろ並行して書かれた別の作品として捉えることができ、ピアニストとしての技量を如何なく発揮できる楽曲となっている。悪魔メフィストフェレスがヴァイオリンを不気味に調弦する場面から始まり、その調べに乗って居酒屋の面々が踊り狂う様子、そしてファウストが見初めた少女の可憐な佇まいを思わせる部分など、劇を見るかのように場面が移り変わってゆくと同時に、リスト自身が持っていた高度なピアノ演奏技術を余すところなく感じるこのことのできる名作である。

解説：畠山正成 (はたけやま まさなり)  
東京藝術大学 楽理科3年

松橋朋潤HP



携帯HP : [http://www.maru-yo.net/M\\_Tomohiro\\_mobi.htm](http://www.maru-yo.net/M_Tomohiro_mobi.htm)  
スマホ・PCでも携帯HP見れます。